

人々はイタコに何を求めるのか (1)

——東日本大震災にみる恐山と三陸沿岸——

What do People Expect from *Itako* (Japanese Shamans)? (I)
Looking at the Connection between Mt. Osorezan and the Sanriku Coast
through the Great East Japan Earthquake

原 英子*

Eiko HARA

Keywords: the Great East Japan Earthquake, Mt. Osorezan, Healings

東日本大震災、恐山、癒し

はじめに

2011年3月11日におきた東日本大震災では多くの尊い命が奪われた。東北地方にはイタコという死者の霊魂を降ろし、死者の語り「口寄せ」をおこなう口寄せミコがいる。震災から5カ月たった8月、初盆の時期に合わせて、『朝日新聞』は、恐山へイタコを求めてやってきた人々の記事を掲載した。震災遺族たちが、遠い三陸沿岸からやって来て、イタコに亡くなった家族の口寄せを頼んでいること、それにより遺族たちは喪失感を埋めることができているという記事である。

なぜ三陸沿岸の人々は、何時間もかけて恐山のイタコをたずねたのであろうか。下北半島は、現在は本州の最北端として、しばしば最果ての地というイメージで語られる。しかし江戸時代は海運航路が集まる地として賑わっており、三陸沿岸からも人々がやって来ていた。そうした賑わいをみせる下北半島の恐山は、海運商人をはじめ、漁師たちの海の信仰ともかかわりが深い霊場でもあった。

東日本大震災後に三陸沿岸から恐山のイタコに口寄せを頼みに来た人々の行動の背景に、そうした恐山の海の信仰や恐山と三陸沿岸の関係を見ていきたい。

その前に、恐山とイタコの関係について触れておこう。

1. 恐山とイタコ

「恐山」の「イタコ」による「ホトケ（死者）の口寄せ」は全国的に有名である。「日本三大霊場めぐり」ツアーや青森・下北観光を兼ねたツアーなど、いろいろなツアーの企画がみられる。ツアーのなかには「口寄せ」が目的のなかに組み込まれて

いて、それでそのツアーに参加を決めた人も多い。恐山菩提寺境内にある宿坊吉祥閣にも、イタコに口寄せをしてもらうために泊まっているという人が少なくない。

最も多くの観光客が恐山にやってくるのが7月20日から24日にかけておこなわれる夏の大祭である。恐山菩提寺では22日朝は、山主が入山する上山式がある。ご詠歌を唱える人々や僧侶、それに籠にのった山主が三途の川から菩提寺総門まで行き、そこで山主は籠を降り、草履をはいて参道を本尊安置地藏殿へ向かい、般若祈禱による本尊供養、大施餓鬼法要、それに地藏めぐりがおこなわれる（華園1991:2、下北ナビ、むつ市観光案内）。

これらの寺院の行事とは別に、菩提寺の境内、総門脇の塀の近くではイタコたちがテントを張って口寄せをしている。しかし上山式で山主や僧侶たちが参道を通る時は、イタコたちも参道脇で出迎えをする。通り過ぎるとイタコたちはまたテントにもどり口寄せを再開する。

人々はイタコのテントの前に列をつくり順番をまってホトケオロシをしてもらうのだが、総門が開いて間もなくテントの前に並んだ人たちでも、場合によっては昼すぎまで何時間も待たされることがある。また、一人が一人のホトケを口寄せしてもらうとは限らないので、あと何人と数えていても以外と時間がかかることがある。毎年来る常連客もいて、そうした人々から、かつては流行るイタコというのがいてそこは人が多くて待ち時間も長かったなどという話を聞く。しかしそれもかつての賑わいで、2011年には、テントが2つしか張られなかった。

イタコが集まってきて口寄せをすることをイタコマチという。現在、恐山の代名詞のように思われているイタコマチでの口寄せだが、歴史はそれほど古いものではないことが指摘されてき

*国際文化学科

た。楠正弘などは大正末から昭和にかけてはじまったと推測している(楠 1968: 116-117)。かつては、全国各地で口寄せがおこなわれていたらしい。堀一郎などを讀むと、1950年代は、九州、近畿、東北に新仏の口をきく風習が根強く残っていたことがわかる(堀 1950: 17)。それが東北地方では近年まで口寄せが残っていた。しかもそれは恐山だけではなく。東北6県すべてに、近年までその活動が見られていた。口寄せをする口寄せミコの呼称も「イタコ」だけではなかった。イタコは、青森、岩手、秋田でしかれたが、同じ秋田でもエンヂゴ、岩手の南部と宮城ではオカミサン、山形ではオナカマ、福島ではワカなど、地域で異なる名称で呼ばれていた(安保 2008: 63、児玉 1934: 13)。柳田国男や中山太郎は、イチコ(市子)という名称が、かつては全国的に広がっていたことを指摘している¹。しかし現在では、「恐山」の口寄せミコを指す「イタコ」が、「口寄せ」という行為とともに、全国的に知名度が高いものとなっている。つまり、「恐山」といえば「イタコ」の「口寄せ」のように、これら3語がいわゆるセットのように、人々の間でつながりをもった言葉として了解されている。

2. 恐山と震災遺族に関するマス・メディアの報道

2011年8月、東日本大震災後、初めての盆が巡ってきた。盆が終わった8月16日の『朝日新聞』山形全県版に、「震災遺族、イタコ頼りに」の見出しの文字がみられた。その近くにやや小さな見出しで、肉親の言葉を聞きにやってきた家族のこと、突然の別れに喪失感埋める思いでやってきたことが取り上げられていた。また、8月18日の宮城全県版では、「震災遺族ら恐山に続々」という見出しがみられた。このときには、はっきりと「恐山」という場所が示され、同じく夫や母や兄に会いに来た遺族という見出しやイタコの口寄せで、喪失感を埋める人々がいたということが見出しに載った。記事には津波で流された夫に会いたくて、三陸沿岸から車で7時間かけて、やってきた家族の話など、宮古や釜石などからやって来た人々のインタビュー記事が載せられている。そうしてやってきた遺族たちは、イタコの話をして肩の荷が下りたと感じているという(『朝日新聞』2011年8月16日山形全県版、8月18日宮城全県版)。

恐山のイタコの口寄せは、全国的に有名となっているが、三陸沿岸から、なぜ初盆の時期に人々がやってきて、亡くなった家族の口寄せを頼んだのだろうか。次に、恐山と海で亡くなった人に対する信仰、それに三陸沿岸地域との関係を見ていきたい。

¹ 柳田国男は、口寄せミコに注目し、東京では神社ミコのことをミコといい、口寄せ巫女のことをイチやイチコと呼ぶが、京阪神などの上方、常陸、土佐では反対に神社ミコがイチコで口寄せミコがミコであることを指摘した(柳田 1913「巫女考」のなかの「ミコと云ふ語」)。中山は、イチコが全国的な名称であることを指摘した(中山 1969: 3-25)。

3. 恐山と三陸沿岸

(1) 下北の海運と三陸地方

江戸時代、三陸沿岸と恐山には往来がみられていた。当時下北半島は北陸・奥羽の海港から出発して下関、瀬戸内海を経由し、大阪へ至る西回り海運と、日本海沿岸の港から津軽海峡を経て太平洋に出で、江戸へ至る東回り海運、蝦夷地回り海運が発達して²、ヒノ材を主力に、昆布やナマコ、アワビなどが、幕府への献上や長崎俵物として出され、下北には米などがもたらされていた(鳴海 1977: 5、34-36、137-138、宮崎 2002: 370)。この3つの海運は、いずれも下北半島北部にある大畑港を利用していた(鳴海 1977: 20-25)。海運にたざざわっていた海商たちは、恐山へ通じる丁塚や、菩提寺境内の常夜塔、浄水盤などを寄進しており、そうした寄進物には現在でも寄進者の名前を読むことができる³。これらの寄進物のなかに、宮古からやってきた人々の痕跡がみられる(宮崎 2002: 369)。

東北地方や北海道を巡り、多くの紀行文や絵を残した菅江真澄(1754-1829年)は5度恐山に登っている。江戸時代、恐山は、円仁による開湯と地藏の靈験による疾病の治癒を求めて各地から湯治客の信仰を集めていたらしく、菅江真澄の日記「牧の冬かれ」⁴寛政4(1792)年11月1日には、湯治の人のために仮屋が多数建てられていたことが記されている(宮崎 2001: 362-363、菅江 1971: 288-289)。そのなかに、宮古からも人が来ていることが書かれている。菅江の日記「奥のうらうら」⁵の寛政5(1793)年6月5日には、閉郡みやこ⁶ 島辺⁷からきたくぐつ⁸が、湯治にきていたが、請われて琴をならしたことが記されている(菅江 1971: 342)。

宮古と恐山のある下北半島の、かつての往来を示す証拠は他にもある。下北の海運と文化について調べた鳴海健太郎は、東回り海運、西回り海運、蝦夷地周り海運のすべてが寄港する下

² 鳴海健太郎は、東回り海運、西回り海運、蝦夷地周り海運と「海運」を使用しているが、宮崎ふみ子は西回り航路、東回り航路、などと「航路」を使用している(宮崎 2002: 368)。

³ 賽の河原には、水沢からも人がきていたことを示す浄水盤が残されている。

⁴ 鳴海(1977: 140-149)には、そのほかにも河原地蔵尊の額、恐山街道の石仏、狛犬などもあげている。

⁵ 日記表紙には「牧の冬かれ」とあるが、この日記の序文にあたるには「未起の冬かれ」と書いている(菅江 1971: 269)。

⁶ 菅江真澄は表紙には「於久能宇良宇良」(ただし2度目の「宇良」は繰り返し記号だが、ここでは印刷の都合上、繰り返し同じ文字を用いた)と書いている(菅江 1971: 307)。この日記の序文にあたるに「奥のうらうら」(こも2度目の「うら」は繰り返し記号が使われている)と書かれている(菅江 1971: 309)。

⁷ 菅江(1971: 342)の注に宮古とある。

⁸ 菅江(1971: 342)の注に岩手県とある。

⁹ 菅江(1971: 342)の注に遊女とある。くぐつ(傀儡)、くぐつめ(傀儡女)は、もともとは呪術をおこない、歌舞を演じて神事に奉仕したが、やがて遊女と化していった(瀬川・石原・加藤 1972: 93-94)。

北半島北部の大畑には「宮古」という姓が多い漁村があり、人々の移住の歴史を示しているのではないかとっている（鳴海 1977 : 34）。

恐山境内での筆者のインタビューでも、現在も三陸沿岸からの参拝者が多く、毎年川体で大勢がやってきているという話がきかれた。恐山菩提寺は、10月上旬の連休におこなわれる秋詣りが終わると、やがて雪の季節となって閉山となる（10月31日）¹⁰。冬季は雪下ろしをする者など数名いるが、春になると再び開山する（5月1日）。恐山菩提寺関係者の話によると、震災から2ヶ月も経っていなかった2011年も、5月の開山後、すぐに、三陸から漁船と漁具を失った漁師夫婦や、家族をなくした者たちが参拝してきたという¹¹。今も恐山と三陸地方の関係は続いているのである。

(2) 恐山と海難者の供養

恐山へ行けば死者に会うことができるとか、先祖の声をきくことができるといわれている。恐山菩提寺の西方には宇曾利湖という湖がある。ここで湖の向こう側に向かって死者の名前を呼び、亡くなったひとに会いに来たことをつげるのだという（南 2011 : 68-69）。宇曾利湖畔の極楽浜にやってくる、湖の方へ向かって菓子や食べ物が供えられ、風車がたてられる。夏の大祭のころは、捧げられた供物が極楽浜一面に並んでいる。こうした宇曾利湖には、特に海で亡くなったり、行方不明になったりした海難者のための供養も行われる。鳴海健太郎は、次のように記している。

「海で亡くなった仏のために、海商、水主、あるいは漁村の人びとが宇曾利湖のほとりで、小舟を流しながら冥福を祈り、今日なお漁に出て遭難し、また遺体が発見されない時などは、この小舟供養がおこなわれている。また江戸時代から大正のころまで、恐山本堂は舟の小絵馬でいっぱいだったと伝えられている」

（鳴海 1977 : 140）

華園聡磨によると、下北半島の東側にある東通村袋部でも、船で遭難死した者がいる家の家族は7月24日の地蔵講でオヤマ（恐山）へ参詣し、「あの海（宇曾利湖）」へ行って供養船に供物を積んで「船コ流し」をするのだという（華園 1991 : 5）。宇曾利湖のことを「海」と表現し、どこにいてもこの船にのつ

¹⁰ 僧侶は下山しているが、現在は円通寺から恐山までのマラソンが11月3日むつ市陸上競技協会の主催でおこなわれており、この競技のあとに閉山となる。雪の状況によって最終的に山門をしめる日にちが変わる。

¹¹ 南直哉院代「恐山あれこれ日記」にも記されている。
<http://indai.blog.ocn.ne.jp/osorezan/2011/05/>

2012年1月20日閲覧

てあの世に無事にいくことを祈るのである。

下北半島の根元に位置する青森県上北郡泊集落でも、恐山の宇曾利湖と海難者の供養に関する習俗がみられる。高松敬吉は、遭難した者が溺死した家では、必ず夏の大祭の地蔵会にお参りをし、ムゲブネ（迎え舟）という小舟にたくさんのごちそうや、小遣い銭と称するお金を載せたり、砂に埋めたりするといっている。そして「どごねいでも（どこにいても）、ムゲブネやしけなア（やるからなア）」などといつて宇曾利湖へ舟を流すという（高松 1993 : 401）。

小舟を流す習俗以外にも、恐山と海の関係を示す信仰がある。下北の海辺集落では、恐山賽の河原の地蔵に灯されていたアガシカゲコ（ロウソクの欠けたもの）を持ち帰り、時化などの時に仏壇に灯して祈願すると無事に帰ってくるという（高松 1993 : 310）。華園聡磨は、この話を下北西部の佐井村磯谷で聞いている。それによると、7月の地蔵講でオヤマ（恐山）へ行ったときにアガシカゲゴをもらってくるという（華園 1991 : 6）。

こうした民俗習慣のほか、恐山菩提寺では2011年3月におきた東日本大震災の犠牲者を追悼する卒塔婆の開眼式を同年7月3日におこなった¹²。この卒塔婆は、山門前の参道の脇にたてられた。

恐山菩提寺境内には、1923年の関東大震災の時も供養塔がたてられている。犠牲者が多かった自然災害の後で、供養をおこなっているのである。今回の東日本大震災の犠牲者を追悼するための卒塔婆も、犠牲者の多かった自然災害という面もあるが、恐山が海で亡くなったり、行方不明になったりした海難者のための供養をおこなう場所であったこと、また恐山へやってくる三陸沿岸からの人が多かったことも、卒塔婆建立の背景にみえておきたい。

以上みてきたように、下北半島一円には海で亡くなったり、行方不明になったりした人々を恐山で供養したり、口寄せしたりする習俗がおこなわれてきたことがみられる。宮崎ふみ子は、恐山の地蔵信仰は18世紀の中後期に発展し、地蔵尊の靈験には「海上安全」が顕著であったことをあげている。それはたとえば石灯籠などの寄進物のなかに「海上安全」を願うものがみられるほか、「延命経」には地蔵による海難救済が説かれ、「略縁記」には、祈願した者が成功した話などが書かれていることにもうかがえることを指摘している（宮崎 2002 : 364, 372-373）。

また、舟を描いた小さな絵馬を本堂にかかげることが、大正のころまではおこなわれていたというが、それは、大正以後途絶えていることから、恐山は海の信仰と深いかわりをもちながらも、その様相は、変化するものであることがわかる。

¹² 南直哉「恐山あれこれ日記」に記されている。

<http://indai.blog.ocn.ne.jp/osorezan/2011/07/>

2012年1月20日閲覧

3. 盆の口寄せ

朝日新聞には、初盆の時期、三陸沿岸から車で7時間かけて家族の口寄せをしに来た遺族の話が載せられていた。高松敬吉によると、下北半島南西にある脇野沢瀬野集落では、溺死者が出た家族は、盆にイタコの口寄せでホトケオロシをしてもらうという。死者の口寄せにより、遺体がどこにあるのかや死者の最後の状況を教えてもらう。中には、もうさがすのを止めてくれというホトケもあるという(高松 1993: 407)。

恐山の夏の大会は7月におこなわれる。5月の開山当初には三陸沿岸から恐山にやってくる人々がいたようであるが、寺院関係者によると、夏の大会に例年大勢やってくる三陸沿岸からの人々がいつもより少なかったという¹³。しかし、盆には少なからぬ人がやってきて、イタコに口寄せを頼んでいた。関係者の話では、震災関係の口寄せも多かったという。

最後に

漁師をはじめとする三陸沿岸の人たちには、従来、恐山へ奉納参りをする習慣があったことや、江戸時代からすでに湯治に行く人たちがみられたことをみてきた。こうしたことは、三陸沿岸の人にとって、恐山詣りが、現在の陸路での行程距離とは違い、もっと身近なものに感じる存在であることを示しているのではないだろうか。2011年の東日本大震災の津波で家族や漁具を失った者たちが、生活環境がまだまだとのえられていなかった5月初旬、恐山の開山とともに参詣に行っていたことは、このことを物語っている。

朝日新聞には、初盆の時期、三陸沿岸から車で何時間もかけて恐山にやってきて、イタコにホトケオロシを依頼し、津波で亡くなった家族の口寄せを開いた遺族が少なからずいたことが書かれていた。恐山は、江戸時代から、海難者供養と関係の深い場所であったことをみてきた。それは海上安全、海難救済だけではない。溺死者が出た家では、家族が盆にイタコの口寄せでホトケオロシをってもらう習慣が、下北には存在していた。この習俗は、地域的にどのようなひろがりをもっていたのか。もっと三陸沿岸との結びつきに注目してみたい。

近年、スピリチュアル的なものを求め、恐山がパワー・スポットのひとつであると、やってくる観光客もいるが、東日本大震災後、初盆に恐山にイタコを訪ねた三陸沿岸からやってきた遺族たちの行動は、地域信仰の歴史的背景のなかからもみていく必要がある。

【引用文献】

青森県史編さん民俗部会

2007『青森県史民俗編資料下北』青森県

安保英勇

2008「心身不調時の対処行動に見る死生観―秋田県北部における巫者と地域住民の諸相」(『死の儀法―在宅死にみる葬の礼節・死生観―』ミネルヴァ書房) 61-72

楠正弘

1968『下北の宗教』未来社

児玉曉村

1934「秋田のイタコ」(住吉土俗研究会『田舎』9) 13-17

菅江真澄

1971『菅江真澄全集』2 未来社

瀬川清子・石原綏代・加藤百合子

1972「遊女」(大間知篤三・川端豊彦・瀬川清子・三谷栄一・大森志郎・大島建彦編『民俗の事典』岩崎美術社) 93-94

高松敬吉

1993『巫俗と他界観の民俗学的研究』法政大学出版局

鳴海健太郎

1977『下北の海運と文化』北方新社

華園聡磨

1991「死者・先祖供養における重層性と地域性―青森県における地藏信仰と「イタコ」信仰との関係をめぐって―」(東北大学文学部日本文化研究施設『日本文化研究所研究報告』別巻28) 1-36

中山太郎

1969(1930)『日本巫女史』八木書店

堀一郎

1950「口寄せ巫女について」(『民間傳承』14(9) 16-18)

南直哉

2011『なぜこんなに生きにくいのか』新潮文庫

宮崎ふみ子

2002「霊場恐山の誕生」(『環』8 藤原書店) 356-379

柳田国男

1913-1914「巫女考」(『柳田国男集』9 筑摩書房(1962))

<新聞>

朝日新聞社

『朝日新聞』2011年8月16日山形全県版、

『朝日新聞』2011年8月18日宮城全県版

¹³ 朝日新聞によると、全参拝者は例年の半分強の1万3200人だった。(朝日新聞2011年8月16日山形全県版)

<ウェブサイト>

下北ナビ

・「恐山大祭」より

(<http://simokita.org/sight/osore/taisai.html>)

2012年1月21日閲覧

南直哉

・「恐山あれこれ日記」

(<http://indai.blog.ocn.ne.jp/osorezan/2011/05/>)

2012年1月20日閲覧

(<http://indai.blog.ocn.ne.jp/osorezan/2011/07/>)

2012年1月20日閲覧

むつ市観光案内（むつ市商工会議所 Web サイト）

・「恐山大祭」より (<http://www.mutsucci.or.jp/kanko/kankotop.htm>)

2012年1月21日閲覧